

## 島恭彦先生の 2 冊の本

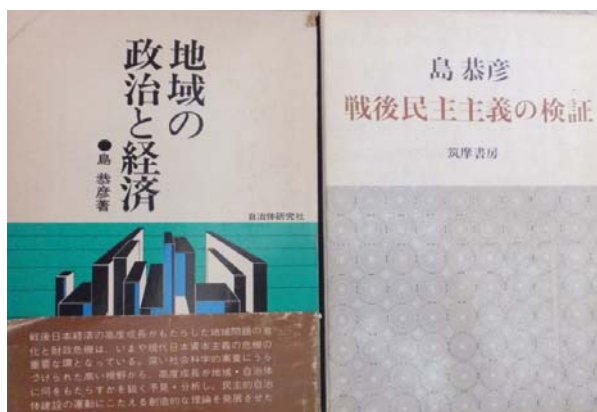
島恭彦先生は日本を代表する財政学者であり、大学院の頃から多くの著作を読み学んできた。久しぶりに写真にある島先生の 2 冊の本を読んだ。

『戦後民主主義の検証』1970 年、筑摩書房「あとがき」から紹介しよう。この書物のはじめにのせた「私の歴史、私の思想」のなかで、「私は戦後にはじめて目がひらかれた、私の精神年齢は 20 代である」と書いた。----

私は 1935 年大学卒業以来敗戦までの 10 年間を、学問の研究や教育にたずさわってきたが、日本の軍国主義が倒された戦後の解放の時期に、はじめて研究者・教育者の戦争責任を感じはじめ、私自身の仕事を私が社会におっている責任にむすびつけて考えるようになってきた。その時から現在にいたるまで、大学での研究・教育以外に、労働者・市民の教育のため、学問の普及のため、学問・思想の自由をまもるため、また平和をまもるための運動に、ためらいなく参加してきた。そういう社会的活動の中で書かれたものを、ここでこのように整理してみると、私の戦後の活動は、三つのたがいに関連をもった領域にまたがっていることがわかる。それはこの書物の中で、「住民のくらしと地方自治」、「高度成長批判」、「社会の中の学問」という形で、分類されているものである。

ここから島先生の思いが伝わってくる。本書所収の「災害の政治と経済」(1953 年)のなかで、安上りの膨張が都市埋立地の災害—水害を呼んでいることは疑う余地のないという指摘は、伊勢湾台風による名古屋南部の甚大な被害を予想させるものだ。また、「軍事研究のあし音」「産軍結合と大学の自治」「大学の自治と大学の財政」などの論考も、いまの時代に対しても大切なメッセージである。

もう一つの『地域の政治と経済』自体体研究社、1976 年は、島先生の 1950 年代からの地域・自治体問題に関する論文、評論、講演などを取りまとめたものである。何回も読んだ「地域開発の現代的意義—投資戦略としての地域開発」など、読みごたえのある論文ばかりだ。付論「地域の政治経済学—私の研究教育史」は、1975 年 1 月 22 日に行われた島先生の京都大学経済学部退官記念講義である。戦前から戦後への、とりわけ研究の歩みが詳細に綴られている。わたしも今年 2 月 22 日に「最終講義」を行ったが、これを読むと恥ずかしくなる。本書から名著『東洋社会と西欧思想』の成り立ち、地域研究の理論と実践など、じつに多くのことを学ぶことができた。6 冊の『島恭彦著作集』有斐閣をもう一度じっくり読むことにしよう。



(2014 年 11 月 15 日)